

日中友好の架け橋

如蘭塾の70年

会期 平成24年8月11日(土)～9月17日(月)

会場 武雄市図書館・歴史資料館

主催 武雄市図書館・歴史資料館 財団法人 清香奨学会

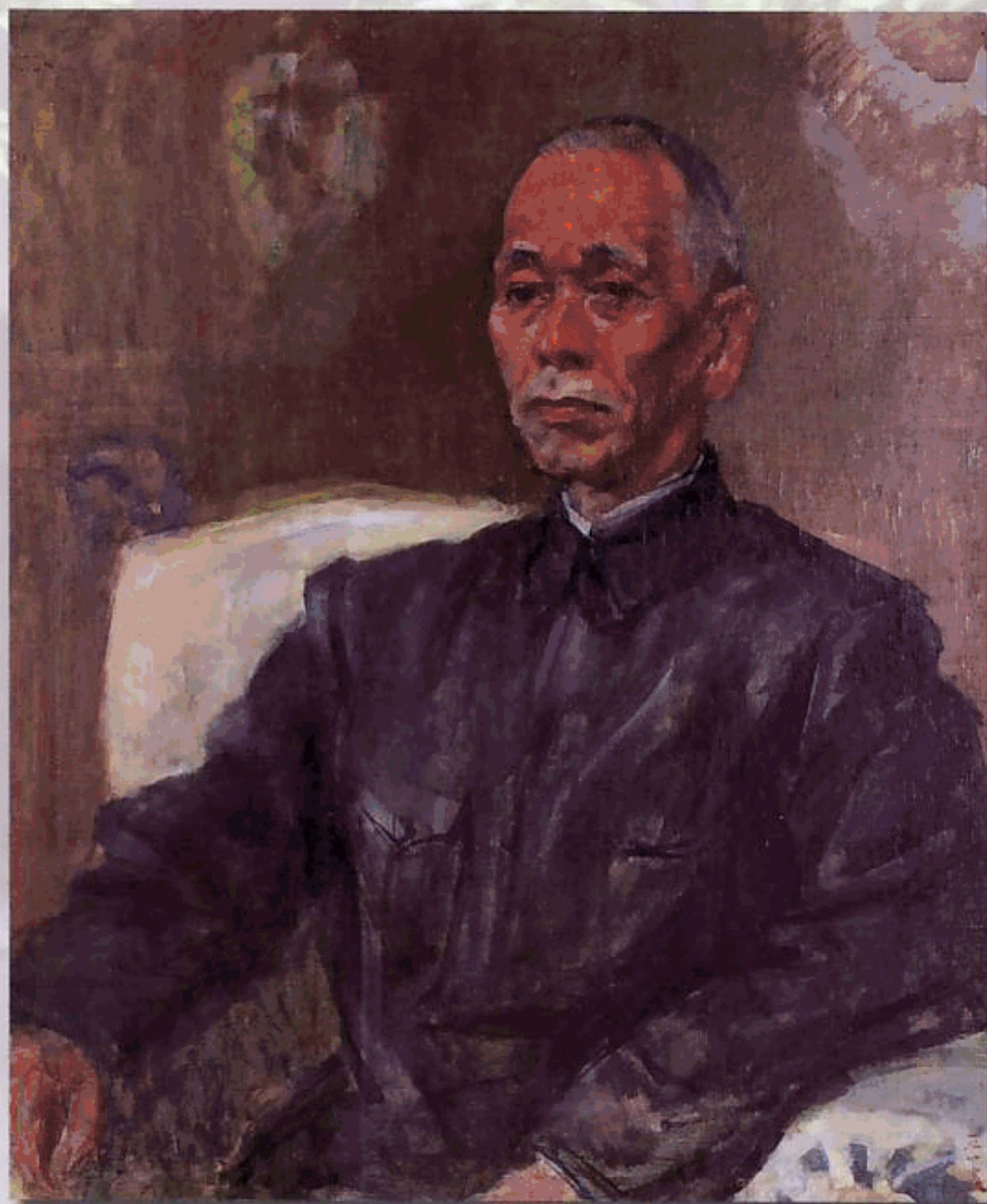
後援 佐賀新聞社・西日本新聞社・朝日新聞社・毎日新聞社・読売新聞佐賀支局・NHK佐賀放送局・STSサガテレビ・株ケーブルワン・NBCラジオ佐賀

協力 佐賀県立佐賀城本丸歴史館・野中伸泰(敬称略)

第2次世界大戦中の昭和17(1942)年、財団法人日満育英会が発足し、御船山山麓に塾舎・寄宿舎・迎賓館・運動場等を整えた「如蘭塾」が誕生しました。戦火が中国に広がる中で、満州(現在の中国東北部)の若い女性たちを給費留学生として迎え入れる、当時の国際交流の壮大な試みの場が武雄に誘致されました。

大戦後の昭和27(1952)年、日満育英会は、財団法人清香奨学会として新たなスタートをきり、以来、佐賀県出身の大学生への奨学金の給付や、中国からの留学生受入れなどの新たな育英事業を行っています。

如蘭塾創立70年、清香奨学会創立60年の今年、財団法人清香奨学会の御協力を得て、「如蘭塾の70年」展を行います。



■如蘭塾創立者 野中忠太肖像画

明治19(1886)年、現在の佐賀県鹿島市に池上林平の四男として生まれる。明治43年に佐賀市の野中烏犀圓11代目・野中亮助氏長女と結婚、養子となる。

大正4(1915)年、満州にわたり奉天(現在の瀋陽)で貿易商を営む。しだいに頭角を現して複数の会社の社長を兼任、土地・建物・タクシー・ホテル・農場などを広く傘下に収め、企業家として成功をおさめた。

昭和22(1947)年・帰国、昭和26年佐賀市千代町(現在の佐賀市柳町)にて逝去。

野中忠太と如蘭塾

かつて満州と呼ばれていた中国東北部で事業家として成功した野中忠太は、その成果を友好と文化の交流に還元しようと日満育英会の設立を志した。中国の若い子女を日本に給費生として留学させ、日本の文化や家庭の実情に親しませることによって相互理解を深めようとした。

この計画は昭和15(1940)年に公にされ、各方面の賛同と共鳴を呼び、同時に施設の誘致活動が起こり、最終的に武雄市(当時の佐賀県杵島郡武雄町)が選ばれた。

育英施設の建設用地には、武雄町の景勝の地・御船山の麓が最適とされ、約39万6千㎡の丘陵地が買収された。昭和17年には文部大臣の設立許可があり、財団法人日満育英会が正式に発足、直ちに塾舎・寄宿舍・迎賓館・運動場・プール等の建設が始められ、翌18年初めには、一通りの設備が整い、今や梅の名所となった御船ヶ丘梅林も、地元の労力奉仕を得て整備された。

昭和18年3月29日、16~20歳の第一期塾生30名が武雄に到着。2年間の過程を経て、昭和20年1月29日に無事卒業した。第二期生22名は、昭和19年3月に入学するが、戦争が激しさを増す中、第三期生の募集は中止され、第二期生も終戦によって、課程途中で帰国することとなった。

如蘭塾は、戦争の終結と同時に、短い歴史を閉じることになった。

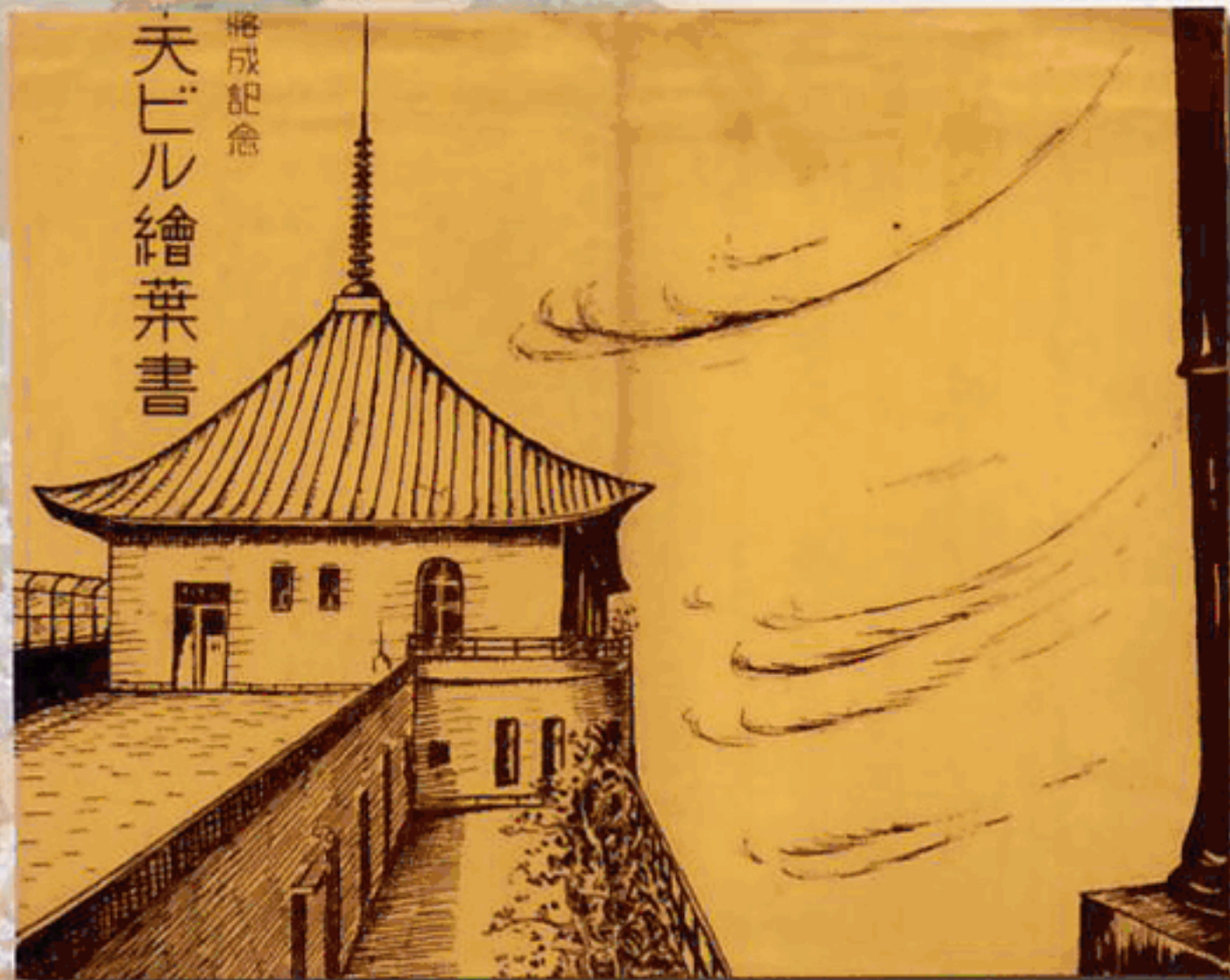


■如蘭塾開設当時の東アジア図

明治37(1904)年に始まる日露戦争の勝利以降、日本は東アジアへの侵略行為を繰り返させた。明治43(1910)年には韓国を植民地とし(韓国併合)、朝鮮総督府を置いて支配した。さらに、昭和6(1931)年9月の奉天郊外での柳条湖事件以後、日本は半年で満州の大部分を占領、傀儡政権である「満州国」を樹立。日本から多くの人々が新天地を求めて満州へ移住していくこととなった。

■落成記念 奉天ビル絵葉書

満州で事業家として成功した野中忠太がホテルとして開業した奉天ビルの記念絵葉書。



絵葉書 包紙



奉天ビル全景



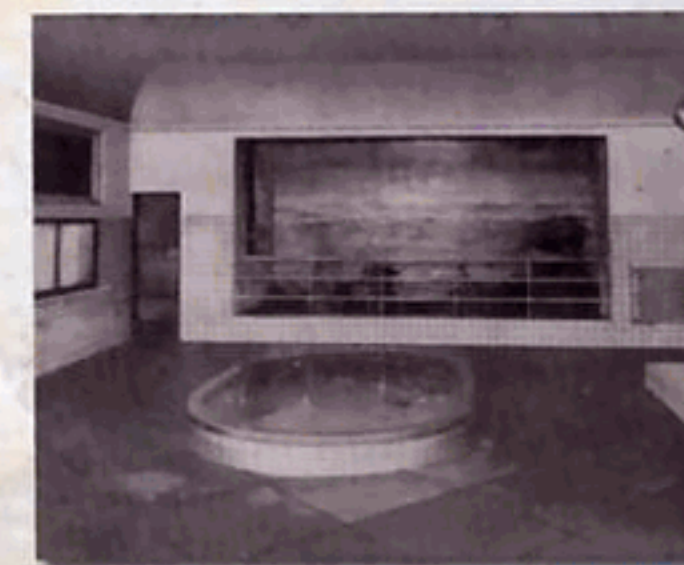
ベビーゴルフ



奉天ビル 6階 レストラン



奉天ビル 正面玄関大ホール

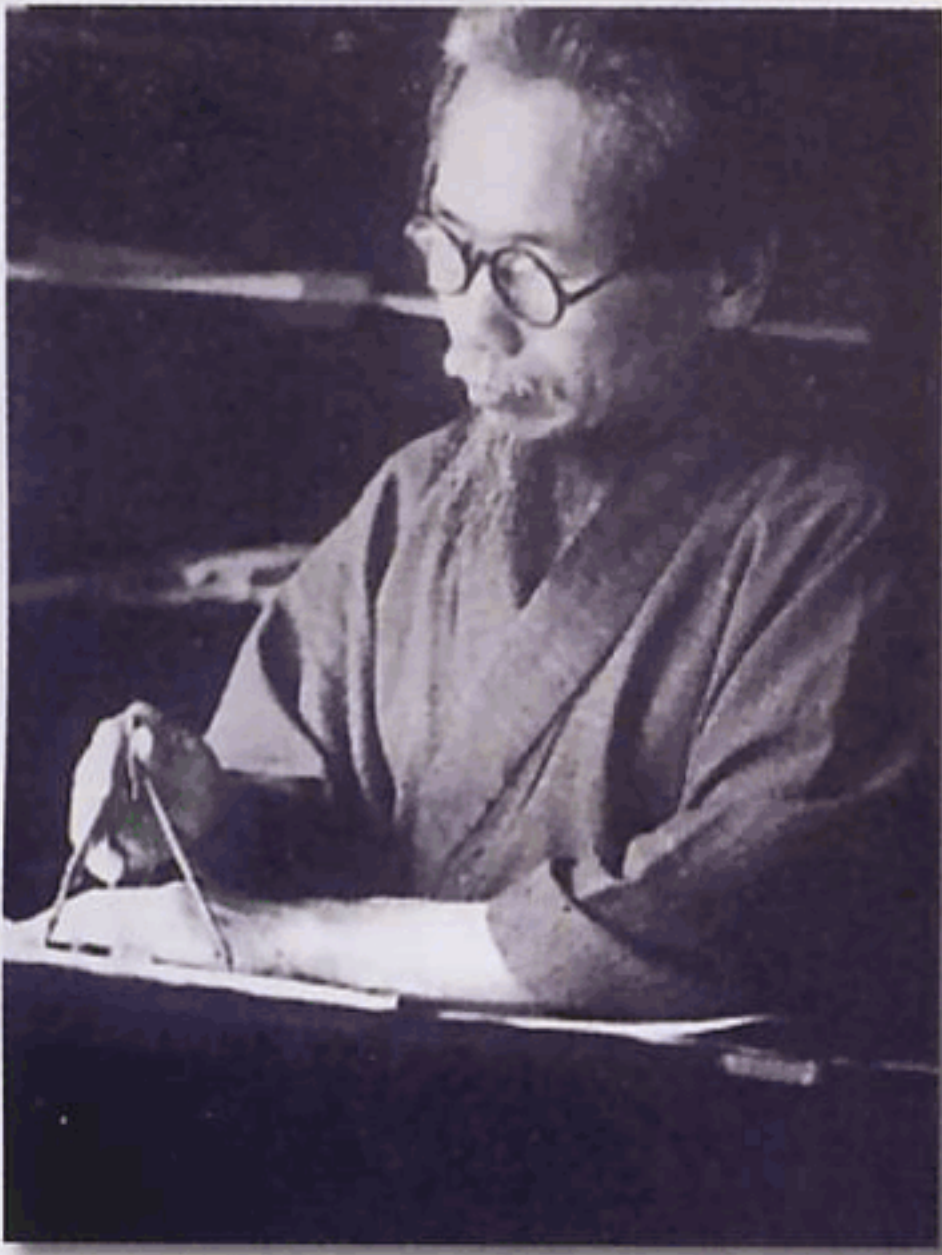


大浴場



応接室

遠藤 新と如蘭塾



明治22(1889)年。福島県生まれ。東京帝国大学建築学科卒業。卒業後、アメリカのフランク・ロイド・ライトに師事した遠藤は、旧帝国ホテルなどを共同設計。44歳のとき旧満州(現在の中国東北地方)に渡り、多くの建物を設計した。

彼には「日満女塾」と呼ばれる幻の作品があった。満州に建設されたと考えられたものの、その所在地と在否、設計内容は不明のままだった。この「日満女塾」が実は如蘭塾のことであると確認されたのはごく最近、平成7(1995)年のこと。九州で、遠藤設計と分かっている作品は、現在如蘭塾だけである。



■建設途中の如蘭塾



■創立当時の如蘭塾



如蘭塾ゆかりの作品

■「如蘭塾」

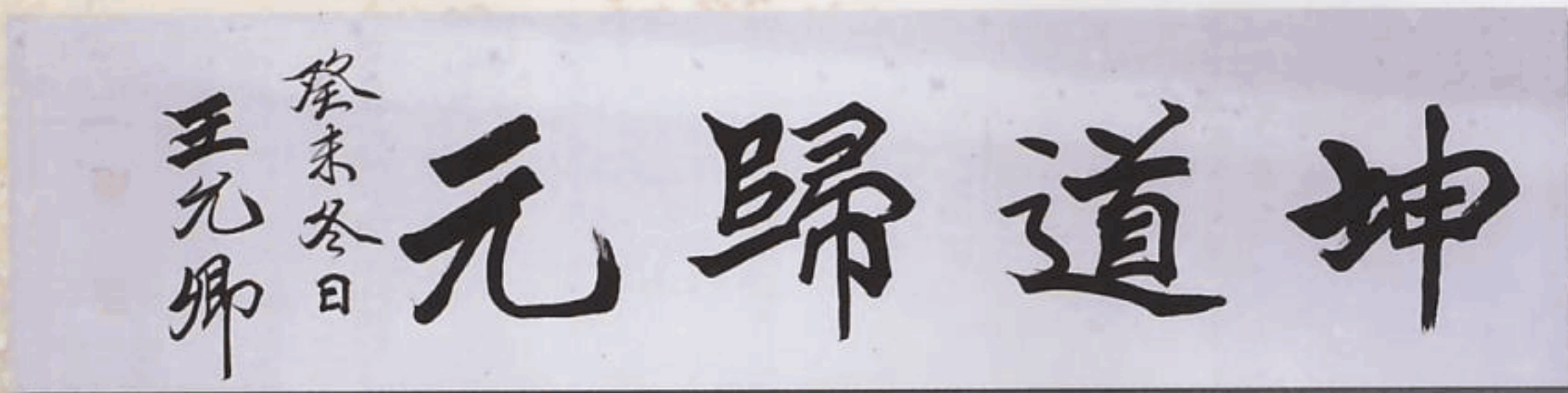
愛新覚羅溥傑 作



満州国の皇帝となった溥儀の実弟・愛新覚羅溥傑の書。昭和12(1937)年元候爵家の嵯峨浩と結婚。書道家としても名高い。平成6(1994)年2月28日、北京で逝去した。享年86歳。

■「坤道帰元」

満州国特命全権大使 王允郷 作



満州国特命全権大使・王允郷が、如蘭塾開塾に寄せて揮毫したと思われる。当時の新聞によれば、彼の一行は昭和17(1942)年12月、開塾直前の如蘭塾視察のため、武雄を訪れている。「坤」は女性を意味する語という。現在も如蘭塾迎賓館(含章閣)の玄関に掲げられている。

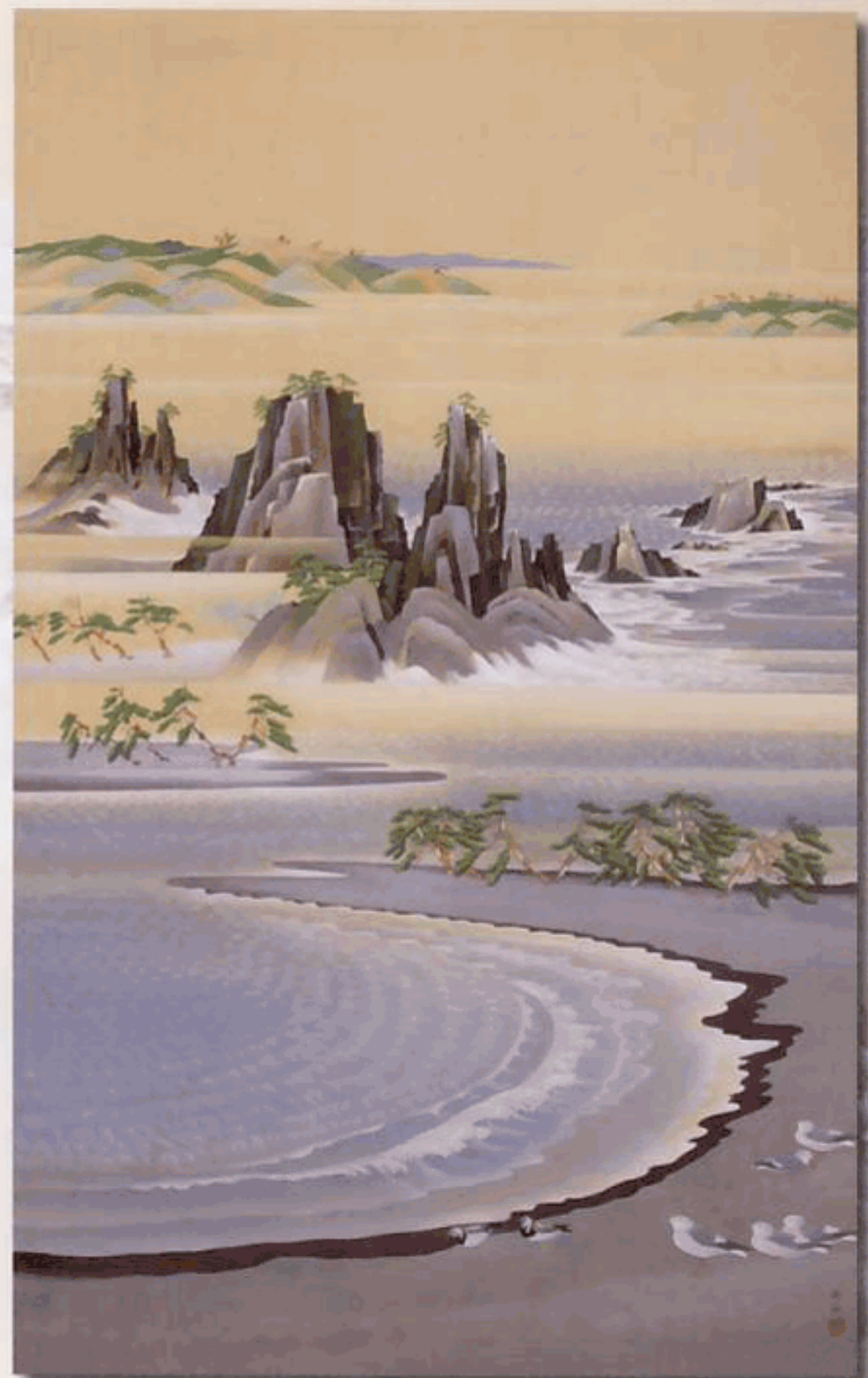
肅親王(1866~1922)は、清朝の皇族のなかでも、最も格式の高い家系の人物で、親日家として知られる。「東洋のママ・ハリ」と呼ばれ、日中間で数奇な運命をたどった川島芳子は彼の実子である。

日本軍は、神道を日本の支配を強める手段として利用し、満州国の精神的なよりどころにしようと、昭和15(1940)年に天照大神を祀った神社「建国神廟」を現在の中国・吉林省に創建している。この書も、そうした流れの中でたたためられたものと推測される。時代を語る資料の一つとして、貴重なものであると同時に、如蘭塾と満州国のつながりを示すものとして収蔵されている。

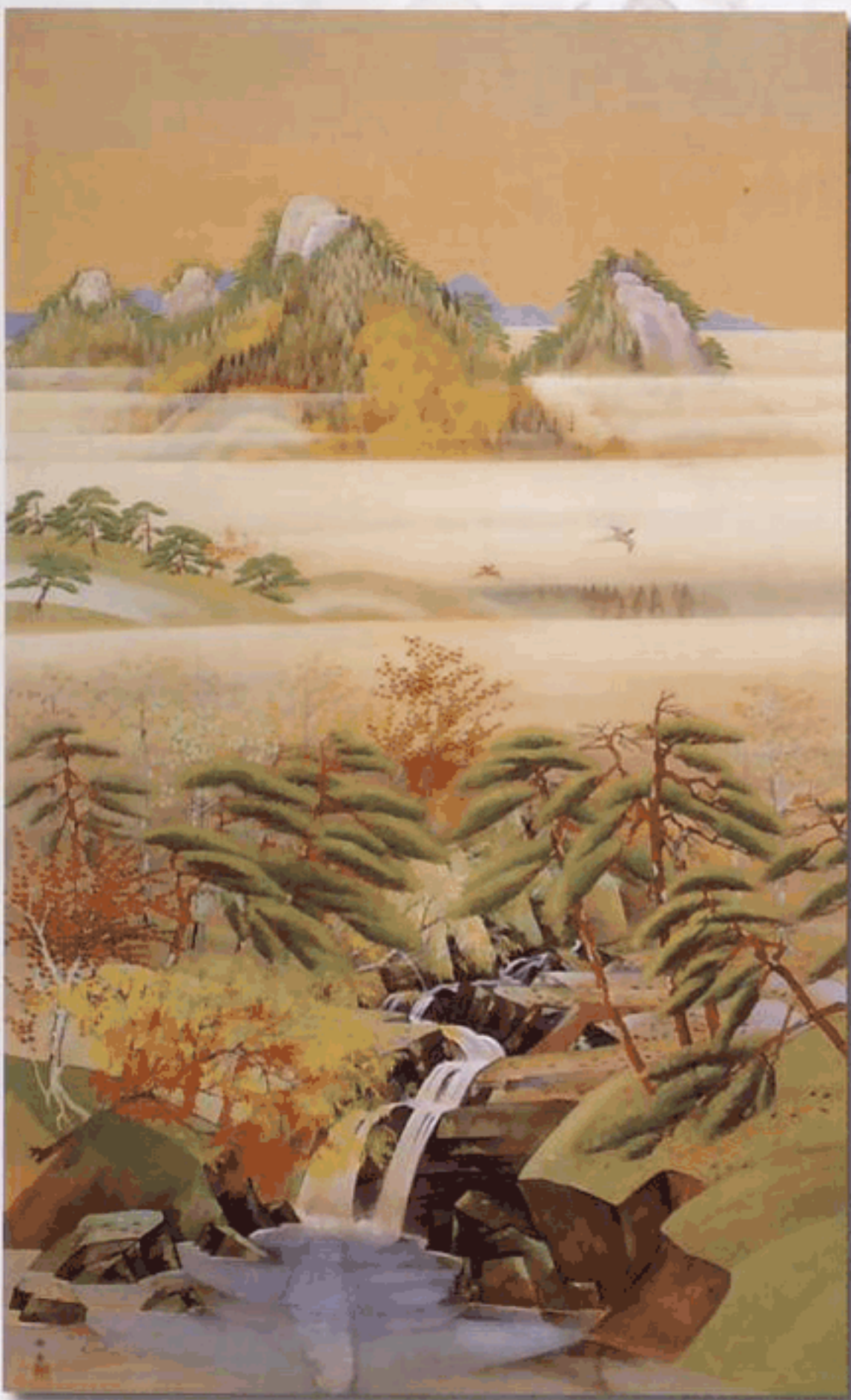


■「日」「月」「天照皇大神」

肅親王 作



武雄の秀峰・御船山の四季をテーマに描かれた襖絵。如蘭塾建設中の昭和17(1942)年、奉天省美術協会審査員の松永南樂が、武雄に6ヶ月間滞在して描き上げた17枚の作品の一つ。現在も如蘭塾迎賓館(含章閣)の応接室を飾っている。



如蘭塾生たちの来武

■奉天ビル前で

如蘭塾第二期生は、昭和19(1944)年3月、奉天ビルに勢揃いし、この後来日した。



■塾生たちの到着風景

武雄駅前通り、佐賀銀行付近



「如蘭塾」の名には、塾生たちが小輪の花から淡い色彩と豊かな芳香を秘めた東洋蘭のように開花することを願う気持が込められている。また、蘭の花は満州国皇室の花でもあった。昭和18(1943)年3月29日には塾生30人が、翌19年には第二期生22人が武雄に到着した。当時の武雄の町民は、小旗をうち振って彼女らを歓迎した。

■武雄神社遥拝



■塾生の指導にあたった助教たち

■如蘭塾塾舎と塾生たち



■御船山と助教、塾生たち

■御船山山水図屏風

松永南樂 作



■富士山図屏風

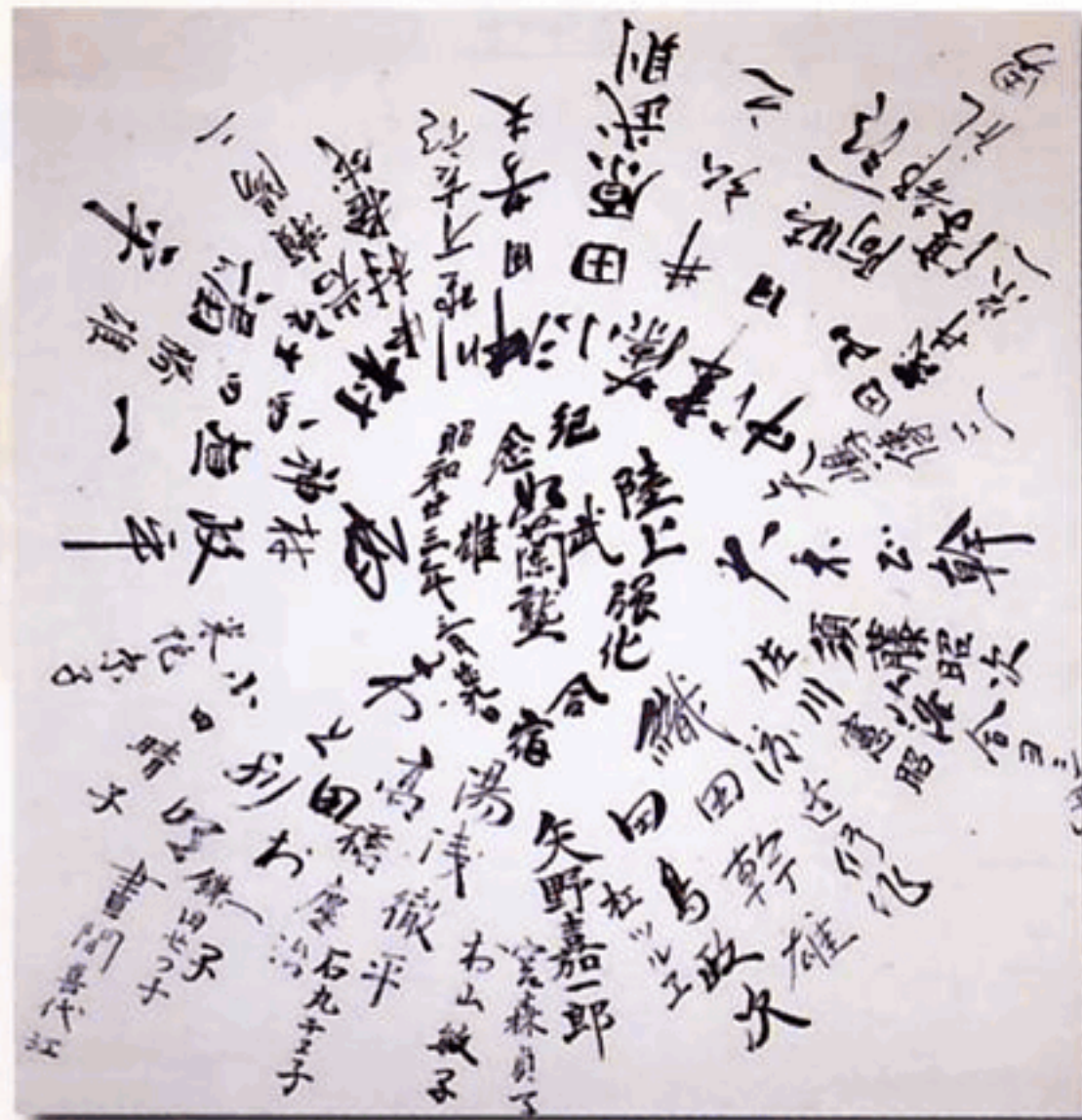
南樂 作



奉天省美術協会審査員・松永南樂の作品。「富士山図屏風」と対をなす一双屏風を意図して描かれたものと思われる。日中関係の絆を具像化するものとして「富士山図屏風」が日本的なもの、御船山の奇岩が中国的なもの象徴と見立てて描かれたのではないだろうか。

その後の如蘭塾

■日本陸連選手写真



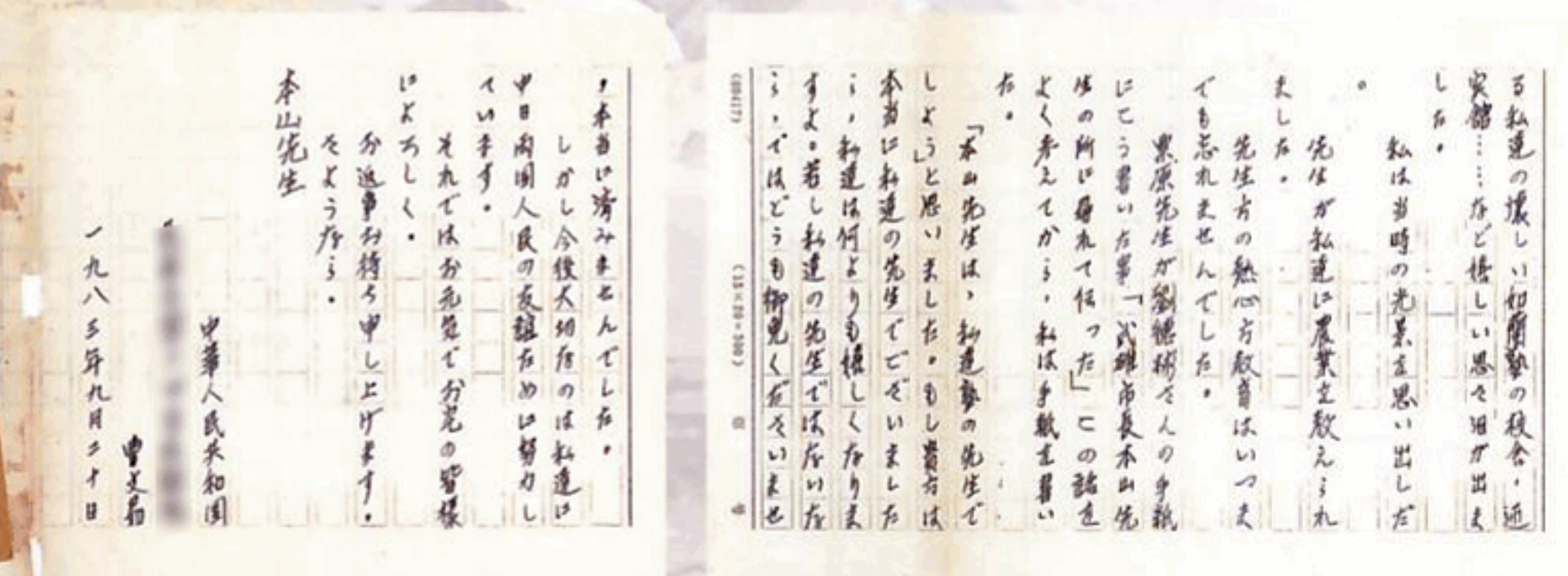
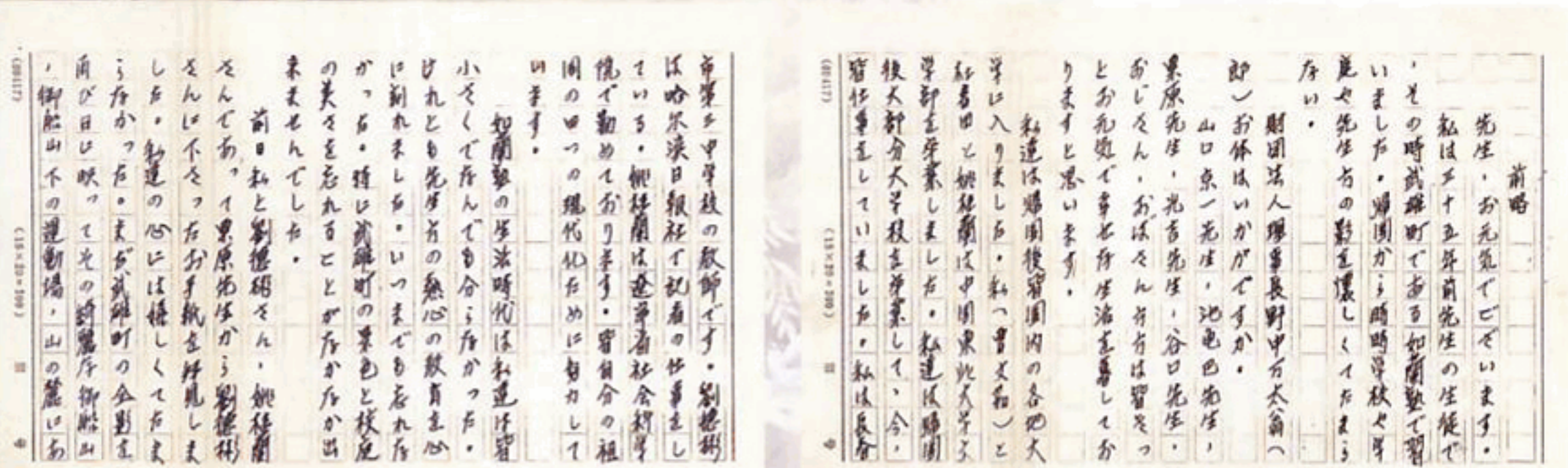
■日本陸連・合宿記念の寄せ書き・花瓶

昭和23(1948)年に、日本を代表する陸上選手がヘルシンキオリンピックを目指して如蘭塾で合宿したときに残した記念の品々。

如蘭塾の迎賓館(含章閣)は、現在もさまざまな団体の集会や合宿の施設として利用されている。



■一通の手紙(元塾生 曹文茹の手紙)から



昭和58(1983)年9月、武雄市長宛てに中国吉林省長春の曹文茹から一通の手紙が届いた。曹文茹は第二期生として昭和19年3月に如蘭塾に入学した生徒の1人で、手紙は武雄を懐かしみ武雄の人たちへの感謝をしたためた内容のものであった。この手紙がきっかけとなり、元塾生と清香奨学会との交流が再開されることになった。曹文茹が宛てた市長本山昌太郎は如蘭塾開設当時の幹事で彼女らに農業を教えた人でもあったが、昭和53年に市長退任。この時にはすでに逝去(昭和56年没)していた。



如蘭塾跡で「一衣帯水」の記念碑を撤する費用
長(右)と主副団長。30日、清香奨学会

40年ぶり青春よみがえる

元如蘭塾生



元塾長代理の立石キクさん(93歳)を取り囲んで寄り添い感無量の元塾生—29日、基山町寿楽園

■日中友好の架け橋「一衣帯水」

一通の手紙から始まった新たな交流により、武雄にはかつての多くの如蘭塾生、あるいはその二世たちが訪れた。昭和60(1985)年には、元塾生28名が40年という時を経て来日。また、平成4(1992)年に初めて如蘭塾二世が佐賀大学に入学したのを始まりに、多数の留学生の受け入れが行われている。「平成の如蘭塾」として清香奨学会の新たな活動が展開されている。

「私の御船山は変わらなかった」。戦時中、武雄市にあった中国子女教育機関の旧如蘭塾の元塾生訪日団が二十八日来佐、四十年ぶり青春の足跡をよみがえらせた。設立者の墓参、恩師との再会、そして市民との出会い、涙と喜びのドラマを繰り広げた。歓迎の輪の中で、塾生たちは常に感謝の意を表し、中日友好を訴えた。

再会喜び日中交流



歓迎

熱烈歓迎の機断幕の前で旧塾生やその家族と北国の春一を合唱する訪中団(基山町華僑飯店)

如蘭塾訪中団

時と世代超え親善の輪

中国語の「さよなら」は、再見「ツイイチェン」。別れては行く再会約束する。半世紀余りの時と空間(おんじゅう)を超えて、武雄市の日中友好財団清香奨学会・如蘭塾(野中萬太郎理事長)は、再見を繰り返して、相互交流を続けている。その如蘭塾が、第六次訪中団を派遣した。同塾と清香奨学会合同の創立五十周年事業の一環、五十数年前に同塾で学んだ旧塾生らが七十歳前後となり、元氣なうちに再会と二世や三世と、次代を担う中国の若者たちとの交流拡大を図るが目的。一行は団長の野中理事長、石井武雄市長ら役員と同塾中国塾生ら二十七人、訪れた旧蘭州の吉林省長春市、遼寧省瀋陽市での交流会にはそれぞれ、三世と家族を含め約八十人が参加。旧塾生は、「お姉さん」と慕っていた訪中団の二人の胸に飛び込み、再会を喜んだ。会話は片言の日本語と筆談、文化大革命時代の苦勞や三世の日本語学習など、話は尽きない。

二世留学生の母校、東北師範大学(長春市)や旧塾二期生が運営する日本語学校(同)、武雄市の高校との交流がある遼寧省鳳城市の瑞華中学校などを公式訪問。学校関係者や生徒らは、日本との交流、留学への熱意を語り、如蘭塾を歓迎した。日中友好の発展を訴えた。

鳳城市に近い鳳城町の丹東市へも足を延ばし、鴨綠江を訪れた。対岸は北朝鮮の新義州市。丹東市の活気に比べ、対岸の煙突からは煙もくもくそり静まり返っているように見えた。国境をつなぐ唯一の長い橋には、中国から食糧を運ぶトラックの列が続いていた。日本からの観光客も国境の町にはあったにないところだった。

一週間の短い訪中だったが、如蘭塾のルートを通じて、北朝鮮との国境の町を垣間見ることができた。在佐特派員が紹介する。(武雄支社・大坪直樹)

如蘭塾略譜

昭和	17 (1942) 年 8月	(財) 日満育英会・如蘭塾設立。教室、寄宿舍、迎賓館建設。	
	18 (1943) 年 3月	第一期生29名入塾。	
	19 (1944) 年 2月	塾生(第一期生)、県内有力者家庭に寄宿。	
		3月	第二期生22名入塾。
	20 (1945) 年 1月	第一期生卒業、帰国。	
		2月	塾生(第二期生)、県内有力者家庭に寄宿。
	8月	終戦。	
	10月	第二期生、帰国。	
	清香奨学会として		
	平成	27 (1952) 年 8月	(財) 清香奨学会発足、県出身大学生へ奨学事業開始。
58 (1983) 年 9月		元塾生・曹文茹より、武雄市長宛に一通の手紙。	
59 (1984) 年 9月		第1次訪中団派遣、元塾生の消息調査。	
60 (1985) 年 5月		元塾生28名招聘。	
62 (1987) 年 6月		元塾生・劉徳彬の娘・劉丹へ奨学金給付。	
元 (1989) 年 3月		迎賓館修復。～5年 続いて宿舍、教室棟修復。	
		2 (1990) 年 11月	県内中国人留学生(佐賀大学及び佐賀医科大学)へ奨学金給付開始。毎年2～3名。
3 (1991) 年 9月		第2次訪中団派遣。	
4 (1992) 年 1月		事務長訪中、元塾生の子女の留学希望調査。	
		9月	元塾生・彭亜雲の娘、張翌彤招聘。如蘭塾寄宿舍に入る。
10月		張翌彤、佐賀大学へ入学。	
		5 (1993) 年 5月	中国語会話教室開講。
11月		元塾生3名、二世子女18名招聘、如蘭塾にて一ヶ月間合宿。	
		6 (1994) 年 3月	元塾生・姜玉英の娘、唐津洋招聘。4月佐賀大学へ入学。
12月		元塾生・杜書田の娘、宋麗紅招聘。翌年4月佐賀大学へ入学。	
8 (1996) 年 9月		如蘭塾創立50周年祝賀会開催。	
9 (1997) 年 3月		元塾生・劉鳳貞の孫娘、曹薇薇招聘。4月佐賀大学へ入学。	
		4月	第6次訪中団派遣。
10 (1998) 年 5月		佐賀市内に「如蘭塾佐賀分室」の建設を決定。	
11 (1999) 年 4月		元塾生・劉鳳貞の孫娘、曹婷婷招聘、佐賀大学へ入学。	
		曹薇薇の夫、陳華慧招聘、佐賀大学へ入学。	
6月		「如蘭塾佐賀分室」落成。	
9月		如蘭塾の迎賓館、教室棟、寄宿舍が国の登録文化財に指定。	
13 (2001) 年 4月		元塾生・彭亜雲の孫、李岩招聘。佐賀医科大学へ入学、後に佐賀大学修士課程及び長崎大学博士課程を修了。	
14 (2002) 年 4月		元塾生・杜書田の孫娘、楊楽招聘 佐賀大学へ入学。	
		5月	如蘭塾創立60周年記念式典開催。
18 (2006) 年 4月		元塾生・杜書田の孫、楊鳴招聘。佐賀大学へ入学。	
	9月	第7次訪中団派遣。瀋陽、長春にて元塾生らと再会。	
20 (2008) 年 10月	元塾生・張金栄の孫、劉檸招聘。岡山大学へ入学。		
	11月	第8次訪中団派遣。天津市内の大学を訪問。	
22 (2010) 年 10月	第9次訪中団派遣。北京にて元塾生らと再会。		
23 (2011) 年 3月	奨学金制度の改正を行い、日本人大学生にも給付を開始する。		
	10月	第10次訪中団派遣。瀋陽にて元塾生二世らと再会。	
24 (2012) 年 7月	如蘭塾創立70周年記念式典開催。		

展示解説 8月11日(土)・8月15日(水)・9月9日(日) いずれも13時30分より



武雄市図書館・歴史資料館

〒843-0022 佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304番地1
TEL 0954-20-0222 FAX 0954-20-0223

URL <http://www.epochal.city.takeo.lg.jp>
mail epochal@epochal.city.takeo.lg.jp

